

に、それ／＼職に就きますから、其の間に一週間六時間だけ、義務として學校へ出す。此處では手紙を書いたり算術を習つたりすると共に、職業の教育も受けるのです。女はタイプライターであるとか、速記であるとか云ふやうなものであります。小學校を卒業して職に就く時に、先づ此の時間を見積つて就職の契約をする。そして此の學校を卒業すると直ぐに普通の人と同様に職に就くのです。これをせないと普通教育が終らないのであります。高等女學校を出た者でも、大學へ行ける人は別として、其の他は別に一年の補習教育を受けるのが普通であります。

要するに、斯う云ふ風にして、努めて子弟に自活の道を立て、やると共に、成るべく、遊ぶ時間を餘分に與へないやうにする。さうすれば従つて善くない事を覺える機會も少くなる譯であります。これ等も日本の教育の上に、幾分考へを及ぼす必要があらうと思ふのであります。

大變纏りのないお話を長時間を費しましたが、これで今日の講演を終へやうと思ひます。

(文責在記者)

## 感情の發表

佐賀縣師範學校長

川島庄一郎

一四

本誌の前號は特に有益に且つ面白く拜見せられました。其の中に一つ「これは大問題ではなからうか」と思はれた事がありますから、例の兀々した筆で一吋投書して諸君と共に研究して見たいと思ひます。

最初の菅原君の御議論と最後の倉橋君の御意見とは誠に面白いコントラストかと考へます。菅原君は感情をありのまゝに發表するがよいといふ御意見、倉橋君は實際上感情の發表を抑へねばならぬ事を暗示せられて居る様に讀まれましたが、果してそれでよろしいのでせうか。

感情は正直に發表すべきものか、さすべきものか、將た寧ろ抑へべきものかといふ事に就ては實は少々迷うて居るのでございまして、多年思を潜めて居ますけれど尙ほハッキリと解決しかねて居

るのであります。

感情を正直に發表する方の利益と致しましては、  
 様の育方では人は正直で友愛的で扱ひやすい人  
 にならうと思ひます。しかしその弊害も亦澤山あ  
 りますまいか。感情をたやすう發表する習慣をな  
 しますと、菅原君も言はれた通り、「自分の感情を  
 直ぐ外部へ現して仕まうから後にのこるものが少  
 くなる」ものですから、尤も、陰鬱でも爆發の危  
 険ある人物でもなくなりませう、其の代り、とか  
 く動力の缺けた、淺しな人間になりはすまいか。  
 御示しになつたゲーテの例で見ましても、彼が容  
 易く感情を發表しなかつた御蔭で其の偉大な詩歌  
 が出來たのではなからうか。鬱積した感情が惡事  
 に溢出しては誠に困りますが、しかし、鬱積した  
 感情がなくてはとかく動力の足らぬ器械の様にも  
 ので、善事も實現はむづかしい様になりはすまい  
 か、教育に若し多少の力があるものとすれば、ど  
 うか感情はなるだけ鬱積させてしかもそれを悉

く善に發動さす様にあらせたいと思ひます。

我が國民性は「言舉せぬ國」と申しまして、自  
 分の朗々たる明き心で他の心を讀む方であるかと  
 思ひます。「私は君を愛して居ます」杯といふが  
 如きは、之はどこかの流儀でありまして、日本の  
 本來の流儀は「愛して居るか居ないかは事實を見  
 て汝の心に問へ」とかう申す方であります。流行  
 語で申せば不言實行で、佛教に引あつれば大乘的  
 で、もありませうか。この氣風から申すと、言葉  
 や顔色に發表するのは假の發表で淺々しい事、眞  
 の發表は事實に於てすべきものとなるかと思はれ  
 ます、若しさうであれば感情の發表を一概に善し  
 とする事は延いては國民性を變更する事にもなり  
 まして、過ぎし戦役に於て毎々聞受けた様な、捕  
 虜にでもならうものなら、オイ／＼聲を擧げて泣  
 き、「命ばかりは……」と哀訴する様にもならうか  
 と思ひまして、どうやらイヤナ事に感じます私は  
 男は勿論、女でも、凡そ元服してから後は「決し

て泣かぬしを本則として、若し泣かざるを得ない時はなるだけ隠して泣く様にありたいと思ひます。

若しそれでよいものとすれば、子供がたやすく感情を發表するのは唯子供として恕しておくべきま

で、決して教養の目的ではなからう、目的はヤハリ泣かぬ様にならせる方にあらうと考へます。

感情を容易に發表する人は、他から見ますと、何時でもその感情のパロメーターを言葉や眼色顔色

杯にかき出してあるのでありますから、安全瓣のついで居る汽關同様、先づ安心して扱ふ事の出來

る人物で、その點から申すと如何にも倫理的で結構であります。さりながら時雨か木枯の様に吹いたり止んだり降つたり霽つたり東風かと思へば南

風の様にありましては相手は随分ウルサイ事ではなからうかと思ひます。さうなると又非倫理的であります。そこで私は感情といふ中就て區別したいと思ひます。例之ば感謝の情とか尊敬の情とか又は困難に出遇うた時勇氣を奮ふ情とかは随

分言葉なれ眼色顔色さては身振態度杯に發表した

いものと思ひますが、恨、嫉、失望、悲しみ、輕蔑、忿怒杯の情は概して發表しないで、遂にはそれ等の情が餘りおこらぬ様に仕向けたいと考へ

ます。感情を容易く發表する事はその一つの感情をば自然消えさすものでありますけれども又、くりかへして其の感情を強くおこす原因にもなると思

ひます。例之ば恐怖の感情の如きで見ますと、非常な蛇嫌ひの婦人でも、一度聲をも出さず、遁げ

もせずに押えらへる經驗を得たら、後々は餘程恐怖せぬ様になりませんが、啗しく騒ぐ癖がつきますと、ますます恐怖します。嘔ぐ様になると思ひ

ます。怒、怨、嫉と皆同様であります。それで私の結論はかういふのであります、感情の發表は子供には恕せねばならぬが大體として決して育てべきものでない、下手に育てると精神的でなくなりやすい若し育てるなら前記の感謝の情とか尊敬の情とかに限りたいたいと。かう申すので

あります。之は國民性情に關する重大な事項と思ひますから、多數幼兒を扱うて居られる諸君と共に十分に研究いたしたいと考へまして、申上げました。決して菅原君の圖書教育に關して彼此申す積でない事は幾重にも御推察を願ひます。

實は私の預つてゐる學校の女生徒は前々までは教員の告別式の時など式場で聲をあげて泣いたものでありますが、私は右の様の考から、「それは精神にとめ置いて、なるだけ聲には出さぬものといたして居ますが、果してどんなものでせう。

尙又小學校の女兒になりますと告別式のある朝採「ア、私はいけなんだ、よいハンケチを忘れて來た、けふは告別式で泣く筈でしたのに泣かなくなりました」と之は實際あつた事であり

## 身體の成長と發達

東京府立女子師範學校附屬小學校主事 日田 權 一

### 一、身體の成長の意義

吾々の身體の成長及び發達と云ふ事は、別々に現はれる譯ではないのでありますから普通には、成長と云ふ事と發達と云ふ事とを、一に見て居るのであります。然し子供の體の發育を研究する上には、此の二を別けて考へることが必要であらうと思ひます。先づ成長と云ふ事と、發育と云ふ事との意味を申上げて置いて、其處から話を進めて行き度いと思ひます。

先づ、成長と云ふ事を、唯、外見上からのみ云ふ場合には、身體の各部分々々が増大して行く事でありませう。例へば、丈けが高くなる、大きが太くなる、従つて各部分の全體である處の、全身の太さや、形狀に幾分の變化が起つて來ます。これを云ふのであります。